

文 献

- 早川 光(1988):「東京の自然水」. 農山漁村文化協会, 204p.
 早川 光(1992):「名水巡礼東京八十八カ所」. 農山漁村文化協会, 187p.
 細野義純(1990):名水を訪ねて(i)—お鷹の道・真姿の池湧水群.
 地下水学会誌, 第32巻, 第3号, 183-190.
 猪郷久義・菅野三郎・新藤静夫・渡部景隆(1980):日本地方地質誌「関東地方」改訂版. 朝倉書店, 493p.
 環境庁(1985):「名水百選」. ぎょうせい, 127p.
 小沢信男・富田 均(1989):「東京の池」. 作品社, 290p.
 日本の地質「関東地方」編集委員会(1986):「日本の地質3・関東

地方」. 共立出版, 335p.

- 島野安雄(1989):名水を訪ねて(8)—出流原弁天池湧水. 地下水学会誌, 第31巻, 第4号, 253-258.
 主婦と生活社(1988):「日本名水紀行」. 主婦と生活社, 143p.
 東京都環境保全局(1989):「東京の湧水」. 72p.
 東京都環境保全局(1991):東京都湧水分布図.

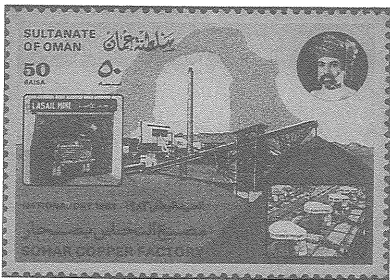
SHIMANO Yasuo and NAGAI Shigeru (1993): Travels of Japanese valuable waters - (3) Kanto area.

〈受付: 1992年7月20日〉

~~~~~ 地学と切手 ~~~~~

## オマーンのソハール銅山切手

P. Q.



石油の生産で知られたオマーンはアラビア半島の先端の回教君主国であるが、銅鉱山の開発が盛んとなった。これは同国が石油依存の経済体質からの脱皮をめざしているものである。オマーンが銅の生産に力を入れ始めたのは、この数年間の石油収入の落ち込みと、同国の石油可採年数が約20年と、他の湾岸諸国に比べて短いことによる。新しい油田の発見も望めない今は、非石油産業の育成が同国にとって急務である。

ソハール鉱山は首都マスカットの北方約250 kmのところにある。鉱床は1977年に発見され、現在の推定鉱量は約1,200万tで採掘コストが比較的安いことが強味である。鉱床は緑色岩中に胚胎する層

状鉱床である。

オマーン政府は1983年に2億ドルを投資し、採掘から精錬に到るまでの一貫工場を完成させた。1984年早々までに3000tの銅地金をイギリスとオランダに輸出している。この様に単に鉱石を輸出するのではなく、地金から随伴する金・銀まで逃さない所に、脱石油を目指す国の特徴がみられる。当局は1984年の生産目標は1万5千t、銅輸出の収入は2700万ドルを見込み、生産規模を最終的に年間2万tにしようとしている。

更に銅山開発を積極的に行う方針を決め、ソハールを中心として半径30 kmの地域に探査網を駆けようとしている。障害としては労働力が極端に不足していることで、従業員約900人のうちオマーン人は335人で残りは外国人にたよっていること、適当な輸出港がないことである。政府は更に銅を素材とするパイプやケーブルを作る企業の育成に努め、付加価値を高めようとしている。

切手は1983年11月にナショナルデーの2枚の中として発行された。採掘所の様子が画かれ、左に坑内に入るトラック、右に精錬所がつけ加えられている。(オマーンの場合は1980年代後半である)